

第29期 上級日本語特別コース（2009年10月～2010年9月）

初 山 洋 介

第29期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、9カ国、10名（中国：2名〔内1名：香港〕、インドネシア：1名、オーストラリア：1名、韓国：1名、スウェーデン：1名、チェコ：1名、ハンガリー：1名、ブラジル：1名、ミャンマー：1名）であり、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～4月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話（10月～4月）

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義（10月～7月）

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～2月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義

を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×7回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

(5) 発展読解（10月～4月）

発展読解として、「精読」（教科書の読解教材に代わるもの）、「新聞読解」、「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの）、「本の読解」（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）などを行った。

(6) スピーチ（10月～7月）

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4、15～30枚程度である。なお、今期も、「論文」「調査報告」「随筆」「創作」という4つのカテゴリーの中から、学生が1つを選んで取り組むこととしたが、最終的に、全員が「論文」

を執筆した。研究成果は『2009～2010年度日本語・日本文化研修生 レポート集』(266ページ)として発行した。また、中間発表会(5月、発表:18分/質疑応答:7分)、最終発表会(7月、発表:20分/質疑応答:5分)を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

1. アレックサンダー・マックシーモッフ(スウェーデン)「千年女優 今敏-平沢進の出演」
2. アン・ニサ・ノビタ・ラーマ(インドネシア)「複合動詞を形成する「見-」について」
3. ヴェロニカ・ベダーニョワー(チェコ)「「芸術」と「人生」- 芥川龍之介『地獄変』を読んで -」
4. キム・エスター(オーストラリア)「若者言葉に対する留学生と日本人学生の意識の違い」
5. 金 セナ(韓国)「『とりかへばや物語』研究 - 「ジェンダー」について考える -」
6. クニヤ・ファウルスティヒ・ユーリ(ブラジル)「文学作品の翻訳の問題 - 川端康成の『古都』の場合 -」
7. クリスティ(香港)「日本人大学生と留学生の昼食行動 - 名古屋大学の学生に聞く -」
8. シュテーゲル・アーコシュ(ハンガリー)「葉蔵は真に人間失格者であろうか」
9. ス ミャツ ナイン(ミャンマー)「日本の少子化対策と子ども手当の登場」
10. 馬萍萍(中国)「現代のおせちとその背景」

(8) 総合演習(5月～7月)

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞や雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは「日本・愛知県の農業・農産物」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ:心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間である。

なお、「日本・愛知県の農業・農産物」については、3つのグループに分かれて、調査・インタビュー等を行い、その成果を報告書にまとめた。報告書は、『2009～2010年度日本語・日本文化研修生 レポート集』に掲載した。

(9) 漢字テスト・漢字コンクール(10月～7月)

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」(20回)を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」(4回)を実施した。

(10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会(ディベート)、ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム)なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本:異文化を通じた日本理解」にも参加した。

(11) アンケート

2010年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する(回答者8名)。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	3人	3人	2人

(12) 今期の試みと今後の課題

今期は、まず、教科書の各課に対応する「復習クイズ」(18課分)について、様々な角度から見直しを行い、改訂し、使用した。また、上でも触れたが、「総合演習」の成果の一部を、『2009～2010年度日本語・日本文化研修生 レポート集』に掲載した。学習者が成果をきちんと文章化したものを、『レポート集』に掲載し、公表することは、学習者の励みになることであるので、今後も続けていきたい。

さて、今期は、上記のアンケート結果から見ると、例年に比べて、学習者全体の満足度が高いとは言えなかった。特に、プログラムの内容を十分に消化できていない学習者が「学習内容が易しすぎる」と記していたケースもあった。重要な学習項目を含んでいるが、一見易しい教材の場合、学習者の意欲をそぐ危険性があるということであろうか。学習者が、「教材」をどのように受け止めるかという観点も取り入れて、今後検討していきたい。